

「情操」という用語の起源と定着過程 についての考察

——明治期心理学史を中心に——

佐々木 正 昭

一

「じょうそう」「情操」は古来からの日本語なのである
うか。「ぢやうさう」がヤマトコトバ^①である可能性はま
ずないであろう。何故なら日本語において「頭音に、濁音を
いたゞくことは古くはなかりし」^②だからである。念のため
各種の上代語辞典を調べたがやはり^③ない。では字音語とし
てはどうか。「情操」の用語は(「ぢやうさう」も含めて)
現在市販されている一般の古語辞典には記載がない。又江
戸時代以前の代表的な辞典も調べてみたが「情操」の記載^④

を見出すことはできなかった。江戸時代以前の用例でこれ
まで見ることのできた唯一のものは『権記』のそれであ
った。同書長保三年二月四日に「才學雖乏、情操可取」^⑤とあ
る。『権記』は『行成卿記』とも言われ平安時代中期の貴
族権大納言藤原行成の日記であり、長保三年は西暦一〇〇
一年にあたる。『権記』におけるこの用例は「情操」の用語
が少くともこの時期に存在したことの証左ではある。がこ
の用例は極めて稀な例であって字音語「情操」は古来日本
語としてはあまり使用されることがなかったのではないか。
というのは既述の如く江戸時代以前の代表的な辞典に記載

がないのと同様、明治時代中期の国語辞典にも記載がないからである。例えば明治二二年刊大槻文彦著『言海』、明治二六年刊山田美妙著『改版日本大辭書』、明治二七年刊物集高見纂『日本大辭林』、明治三一年刊落合直文著『言波の泉』にはいずれにも「情操」の項がない。明治時代に入つて西洋の辭書に倣つて体系的な日本語の辭書を目指したこれらの先駆的な辭書に「情操」の項がないということは、この言葉が字音語としても使用されることが極めて稀であつたと推断する他不い。ところが明治四〇年刊『辭林』、同四一年刊『国民大百科辭典』、大正五年刊『大日本國語辭典』には「情操」の項があり、同一一年刊『改修言泉』第三卷にも【名】『哲』『英 Sentiment』智的作用の最も複雑なる關係に伴ひて生ずる感情。即ち情緒の更に發達したるもの。智的情操・倫理的情操・美的情操（即ち趣味）・宗教的情操等に分類す。」とあり、昭和八年刊『大言海』第二卷にも【英語、Sentiment. ノ譯語】發作性ノ精神ニシテ、眞理ヲ尙ビ、道德ニ從ヒ、眞美ヲ愛スルナドノ感情。『詩的情操』と「情操」の項が入つてきている。この事實は何を意味するのか。大槻文彦は『言海』の「本書編纂の大意」に次のように記している。「近年、洋書翻譯ノ事、盛ニ起リテヨリ、凡百ノ西洋語、率子譯スルニ漢語

ヲ以テセリ、是ニ於テ、新出ノ漢字譯語、甚ダ多シ。然レモ、其學術専門語ノ高尚ナルモノハ收メズ、普通ノ語ニ至リテモ、學者ノ譯出新造ノ文字、甲乙區區ニシテ、一定セザルモノ多シ。故ニ、是等ノ語モ、篇中ニ收メタル所、甚ダ多カラズ、應ニ後日一定ノ時ヲ待ツベシ。」同書の「おとばのうみのおくがき」によれば、同書は明治八年に起稿され「十七年の星霜」をかけて同二四年に上梓された。稿本の淨書を始めたのは明治一五年九月、初稿後、再訂終了は同一九年三月とある。後述するが大槻は明治一五年刊井上哲次郎抄譯『倍因氏心理新説』の校訂をしている。井上がこの書で sentiment を「情操」と訳していることからみて、大槻が sentiment の訳語としての「情操」を知っていたことは間違いない。又明治一四年刊『哲學字彙』にも sentiment の訳語に「情操」が充てられており、影響力の大きかったこの書を大槻が目を通していないなどということとはあり得ない。大槻が『言海』に「情操」の項を置かなかつたのは「一定セザル」學術専門語の訳語と見做したためであつて、怠慢というより大槻が言語學者として慎重、誠実であつた証左と言えよう。かくして「後日一定ノ時ヲ待」つて上梓された『大言海』は明治四五年に稿を起して亦十余年、業半ばにして他界した大槻の後を襲つて新村出

等が完成したものであるが「大言海第一巻の發刊に際して」として大槻茂雄は次のように述べる。「往年の言海は専ら普通語の辭書として編纂せしを、今この大言海はその單純なる増補にはあらず、(略)語詞の擴充頗る廣汎なる範圍に互れるものとす。殊に語原の闡明は父翁の最も力を盡しし所にして、出典の徵證、年代の指示に意を致したること亦甚大なりき。かくの如くにして、阿行の如きは稿を改むること五回、加行、佐行、亦これに次げり。」かくして「情操」の項は大槻自身の手によって『大言海』に設けられたものであることがわかるが、大槻は「情操」はあくまでも sentiment に充てられた和製字音語の訳語であると思つていたものと思われる。といふのは前述の如く大槻はできる限り各語の典拠を明示する姿勢を貫いているが、「情操」にはそれがなく勿論『權記』の用例にも触れていないからである。

以上極めて大雑把な資料によるものではあるが、以上のことから次のような推論が成り立つ。(一)「じょうそう」はヤマトコトバではない。(二)字音語「情操」は平安中期に用例があるものの明治に入るまではその使用例は稀であった。(三)「情操」は明治以降哲学乃至心理学の専門用語 sentiment の訳語として広まった。(四)「情操」が日本語として

市民権を獲得し人口に膾炙されるに至るまでには明治時代一杯乃至は大正初期までの時を要した。

二

さて『權記』の「情操」の用例は直ちにこの語がシナ語(漢語)ではないかという疑念を抱かせる。シナ語は奈良時代より大量に取り入れられ、それ以前には文字の無い日本語の基礎になったもの故にこの可能性は大きい。だがシナ語は一字・一音・一語を原則としており短い発音と少ない字数で複雑な意味を持つ字音語を限りなく作ることができる。それ故に本来のシナ語の他に我国で作られたものも多く「情操」も又このような和製字音語である可能性も大きいのである。『辭源』には「心理學語。最複雑之感情而其發作由於精神之作用者。即尊重眞理及愛美之感情也。」とあり、『辭海』には「(Sentiment)心理學名詞。諸種感情以一觀念爲中心而組成之系統爲情操、即情緒之理智化、而超利害之見者也。可別爲四類：(1)求知情操 (intellectual sentiment)、如求知有爲學問而學問之情感。(2)審美情操 (aesthetical sentiment)、如欣賞藝術時而有優美崇高之情感。(3)道德情操 (ethical sentiment)、如博愛及同情等。(4)宗教情操 (religious sentiment)、如宗教上之虔敬感情是。」とある。ここで見る限り「情操」

は心理学用語 *sentiment* の訳語であり、それ以外に記載のない所から判断すればそのために新たに作られた字音語であるということになる。因みに『佩文韻府』¹⁰には「情操」の項はない。この辞典は収容語数五五万、一一の語につき過去三千年間の各種文献の用例を周到にあげる。が吉川幸次郎氏によれば、過去に発生した複合語のすべてを収めるわけではなく、又文言のみで白語が欠けているという¹¹。隠れた用例があるのではないかという疑問は残るものの、次に日本語との関係から明治以降の代表的な漢和辞典を二、三みておきたい。明治三六年刊重野安禔他監修『漢和大辭典』には「情操」はない。諸橋轍次著『大漢和辭典』には項はあるものの『辭源』と類似の心理学用語としての説明があるのみであり、上田万年他編纂『大字典』¹²にも「①みさを②〔心〕sentiment 最も複雑なる感情にして其發作の主として精神的な心作用をいふ。」とあるのみで典例はない。

以上不十分な考証ではあるが、「情操」は古来からのシナ語ではなく *sentiment* の訳語として比較的新しく作られた字音語であると推断し得るであろう。

さて、次に問題になるのは「情操」の訳語が中国と日本のどちらで先に作られたかということである。『權記』に

用例があるものの、その後の使用例を既述の如く見出し得ないためこの用語が先ず中国で作られ日本に輸入された可能性も考えられる。がこれは次章で述べるこの用語の定着過程からみて恐らく逆であろう。歴史的にみても中国の国家としての近代化は日本よりかなり立ち遅れた。従って近代的な学問の成立も日本より遅れたのである。我国では明治初年から二〇年代の半ばにかけて、学問の広汎な領域において學術用語確定の努力が意識的、精力的に行われている。しかもその多くはシナ語もしくは和製の字音語によって作られたのである。かくして多くの學術用語が明治二〇年代の半ばに充足され、それが次第に国民文化として浸透し、日清戦争後は中国をはじめ、漢字を用いている東洋諸国にも輸出されている。¹³「情操」という用語も又このような経緯を辿った學術用語の典型であったと思われる。次に明治期心理学史上のこの用語の定着過程を考察する。

三

明治時代初期、西洋文明と西洋社会の優位性を痛感する余り日本の独立と近代化を推進するには日本語を廃止すべきであるという論があった。¹⁴しかしこのような西洋の衝撃に際しても自国語を廃することの弊害を説き、日本語をも

ってそれを吸収すべきであると主張した人々がいた。我々が現在、一応所与の日本語によって思索、研究、教育することができるのは、自国語によって西洋文明を吸収する決意をし、そのために労苦に満ちた作業を行った先人の努力の賜物なのである。この先人の第一人者として西周を掲げることが出来る。西は「哲学」をはじめ多くの訳語を創案し西洋文明の移植に尽したが、心理学も又西によって初めて日本に紹介されたのであった。西は「致知啓蒙」において Psychology or Mental Philosophy を訳して「性理ノ學」とした。明治七年のことである。さらに西は明治一年我国初の心理学翻訳書『奚般氏心理学』を上梓し、ここで初めて「心理学」という訳語を用い、それが今日まで使用されているのである。「情操」に関しては、西はこの訳書中上冊では sentiment に「情思」の訳語を充て、例えは moral sentiment を「道德ノ情思」、「亞當士美校、其道德上情思ノ考定中ニ」と訳している。ところが下冊(翌一二年刊)ではこれは「徳義ノ情操」「道義ノ情操」と訳されており、最後に付加されている引用書目にも「道德情操考定 亞。士美校」となっているのである。又他にも「相隣ノ情操」といった訳も見受けられる。つまり下冊では明らかに「情思」の訳語が棄てられ「情操」の訳語が用い

られているのがわかるのである。しかし西が下冊の sentiment をすべて「情操」と訳したかというところではなく moral sentiment を「道德ノ節操」と訳したり patriotic sentiment に「愛國ノ情操」と「愛國ノ情」の両様の訳語を与えたりして甚だ訳語が一定していないのである。西はこの書の凡例において綿々とこの種の翻訳の難しさを訴えているが、確かに我国における前人未踏の学問の翻訳にあたっては我々の計り知ることのできぬ苦勞があったに違ひなく、訳語が揺れ動くのも無理からぬ事と思われる。参考のために西の sentiment の訳語及び「情操」の用法をその全集から拾っておく。「約束ノ一事実ヨリ權義ト情操トヲ生シテ」(「哲學關係斷片」新版第一卷、推定明治三、四、六年以前)「Sentiment 意見、説」(Mental Philosophy の譯語覽え書、新版第一卷)「此二種ノ性、質ノ發スル位置ハ」(明治六年「生性發蘊」新版第一卷)「吾人社會ノ情操ヲ指ス者ニシテ」明治八年「人生三寶説」新版第一卷)「權利ノ情操」「所有權ノ情操」「名譽ノ情操」(「学士區令氏權利爭鬭論」第二卷、推定明治一五年より翻訳開始未完)この「情操」は Gefühl の訳語である。

これが全集にみる sentiment 及び「情操」に関する用例のすべてである。以上のことからわかる通り西は「情

操」を必ずしも心理学用語として限定したわけではない。それは Haven の心理学においては sentiment がサリー、シャンド、マクドゥガルのようには特別な心理領域として設定されていなかったことが主因であるが、sentiment という語自体が極めて多義であることにも原因がある。しかし不確定ながらも「情操」という用語は西によって sentiment, feeling, Gefühl の訳語として先鞭をつけられたとみてよいだろう。ただ西が「情操」という字音語を何かの文献から取ったのか、新しく作製したのかという問題は、西が何故に「情思」を捨て「情操」の方を取ったのかという疑問同様、現時点ではよくわからない。

西の『癸般氏心理学』は我国初の心理学書ということがよく読まれ影響が大きかったものようである。高島平三郎は我国初期心理学発達過程を第一期ヘヴン時代、第二期ベイン時代、第三期サレー時代、第四期新心理学時代と区分している。以下この区分に沿いながら直接原本に触れることのできた心理学書によって明治期における「情操」及びその周辺の歴史を辿ってみることにする。

明治一四年心理学書ではないが訳語の確定に大きな役割を果たした『哲学字彙』が刊行されており、これには「Sentiment 情操、Altruistic sentiment 主他情操、Egoistic

sentiment 主我情操」とある(尚同書は明治一七年に改訂増補されるがこの項に変更はない)。明治一五年井上哲次郎抄訳、大槻文彦校訂『倍因氏心理新説』が出版され「ベイン時代」に入る。同書には「作家ノ情操」(卷之二)「宗教上ノ情操ハ、柔和ノ情ト恐怖及ビ宏壯ノ情トヨリ成ル者ニテ、政府ニ對シテ起ル情操ト相類ス」(卷之三)等 sentiment を「情操」と訳しているが、「自推ノ情」(卷之三)の訳も見受けられる。明治一六年刊坪井仙治郎編述『心理要略』には「情操」なし。明治一八年刊有賀長雄著『教育適用心理学』では情緒を三種に分類したサリーの説が次のように紹介されている。「(一)私情—第一ヲ個人又ハ主我ノ情緒(Personal, or Egoistic Emotions)」(二)同情—第二種ヲ同情(Sympathy)又之ヲ交感トモ翻譯ス」(三)中情—第三種ヲ中情(Sentiment)又情操ト譯ス。さらにこの「中情」は「(イ)智力上ノ中情(Intellectual Sentiment)、(ロ)好尚上ノ中情(Aesthetic Sentiment)、(ハ)道德上ノ中情(Moral Sentiment)」の三種に区分されている。ここで有賀が sentiment に「情操」を付加しながらも「中情」の訳語を充て、しかもその後の訳語は「情操」ではなくすべて「中情」で通しているのが目を引く。がこれも故のないことではなく、「中情」は「心のうち」(心)と。○「揚雄』『舒……之煩惑兮』』という典例

のあるシナ語であり、有賀にとつてはいわば素性の知れぬ「情操」よりもより良く、より自然な訳語に思われたに違いない。そしてこれがシナ語の素養のあつた当時の知識人一般の共通の感覚であつたものと推測される。有賀が「情操」の訳語を付加したのは「哲學字彙」編纂に協力した者としてこれを無視することができなかつたためであろう。

明治一九年ペイン著、矢島錦蔵訳『心理學』が出版される。凡例に「譯字ハ甚タ一定セサルカ故ニ或ハ諸ノ譯書及ヒ字彙ノ類ヨリ最モ適當ナリト思ヘルヲ取リ或ハ新ニ之ヲ撰ミタリ」とある。訳は原書の第一部のみであるが総目次が訳出してあり、これによれば sentiment は「敬宗教ノ感情」「宗教ノ感情」の如く訳されている。この書は同一一九年に松島剛等合訳『心理全書』として全訳が刊行されるが、ここでは sentiment は「祇度宗教上ノ情操 (Veneration the Religious Sentiment)」等「情操」の訳語が充てられている。この書の凡例には「譯字ハ専ラ東京大學三學部ノ印行ニ係ル哲學字彙ニ據ルト雖ドモ間接般氏心理學倍因氏心理新説等ノ諸書ヨリ採ルモノアリヌ穩當ノ譯字ヲ得ザル者ハ原語ヲ記スモアリ」とある。同一一九年には和久正辰訳『左氏應用心理學上』^⑧が出版され、「サリー時代」に入る（下巻は翌年）。和久は上巻例言において有賀の『教育適用心理學』は左氏の『心理學提綱』^⑨を基礎にして書かれたものである、とした後「學語 (Technical Term) ハ讀者ノ會得ニ便ナラシメシメガ爲メ姑ラク在來ノ譯例ニ從フト雖ト就中ソノ不當ナルモノハ譯者自ラ其譯字ヲ新定ス之ヲ例セハ從來 Intuition (インテュイション) ノ譯語ニ用フル直覺力ヲ生知力ニ改メ Emotion (エモーション) ノ譯語ニ用フル情緒ヲ感動ト爲スノ類ナリ」と述べて『哲學字彙』の二つの訳語を例に掲げてその不当性を主張し、訳語の改竄を図っている。sentiment については下巻において「感動」を三種に大別して(一)自愛的感情 (Egoistic Feeling) (二)社交的感情 (Social Feeling) とした後「(三)其第三叢類ハ高等ナル複雑的感情ヨリ成ルモノニシテ愛國心、敬天心、慈悲心、等ノ如キ是レナリ之ヲ情想 (Sentiment) ト曰フ而シテ之ヲ分テ智力的情想即チ眞理ヲ愛スルノ心審美的情想即チ美麗ヲ賞スルノ心。及ヒ道義的情想即チ本分ヲ尚フノ心ノ三類ト爲ス」として、sentiment に「情想」の訳語を充てている。「情想」も又「おもひ」○「楞嚴經』一均等」という典例をもつたシナ語であり、和久も又有賀と同じく和製字音語「情操」を好まず、シナ語「情想」をより適切な訳語として定着させようという意図があつたのであろう。明治二〇年井上圓了著『心理摘要』には「情操 Sentiment」として「宗教の情 Religi-

ous sentiment]「審美の情^{美情} Aesthetic sentiment]「道德の情^{徳情} Moral sentiment]「智力の情^{智情} Intellectual sentiment]及び「同感の情 Sympathy」の五情を掲げている。明治二〇年、ヘイン著、谷本富他訳註『心身相關之理』「情操」なし。明治二二年、バー・マース著、湯本武比古抄訳『小學校教師用心理學摘要』には「感應^{ゲフュ}」を「覺性的、知性的、審美的、宗教的、道義的感應、自己感應及び同感」に区分し、さらに審美、宗教、道義の感應を併稱して「理想的感應」、自己感應と同感を併せて「神聖的感應」としている。明治二二年、バルド井ン著、矢島錦蔵訳『普通心理學』では情緒を「一、自愛即自我ノ情二、主他ノ情即同情三、汎情(眞理情・美情・道情)」と分類するが、ここでの情はすべて Emotion である。明治二三年、澤柳政太郎他同纂『心理學』では情緒を「私情 Emotion of self・同情 Sympathy・中情 Sentiment」の三種に分類し、sentiment に「中情」の訳語を充てながらも「情操」を使つての説明もあり、訳語が混乱している。

さて、明治二三年には元良勇次郎著『心理學』が出版され「新心理學」の時代に入る。元良はジョンズ・ホプキンス大学でホールの指導の下で研究し明治二一年帰国、翌二二年東京帝国大学において我國初の心理学教授に就任、我

国実験心理学の祖となつた^①。元良はこの書の緒言に言う。「今や我國の文學ハ日月よ駸々乎として歩を進め。殊よ教育學の如きハ世人の注意を促し教育ヲ關する良書を求むる人多きヲ至れり。隨て其の需要に應ずるの書亦少しとせず。特リ心理學の如きは其の書無きに非ずと雖も。尚ほ未だ完全なりと云ふ能はず。」彼が嘆ずるように我國の初期心理学書は英國系の思弁的なものばかりで、しかもそれは高等教育及び特に教員養成用教科書として使用されたのであつて、心理学は教育応用の附隨の學の域を出なかつたのである。独立の學としての心理学確立への元良の試みはこの時点では端緒に附いたばかりでその実験的方法が定着するにはまだ時を待たねばならなかつたが、この書が心理学に与えた影響は大きく、これを期に記述的、生理學的、實驗的な心理学書が従來の思弁的なものに代つて多く移入されてくるようになる。この書は極めて生理學的的色彩が強く、「情操」に關しては「情操」の語なく「愛情、社會的感覚、倫理的感覚」として扱われている。明治二五年、牧瀬五一郎著『教育応用心理學講義』「情操」なく、感情を「(一)知識に伴ふ感情(二)衝動的現象に伴ふ感情(三)審美的感情(四)人的感情(五)宗教的感情」に分ける(末尾に「心理學術語」として情操 Sentiment とあるが本文中に記載はない)。

明治二六年能勢栄訳『教育應用根氏心理学』「理想的偏向の区分」として真、善、美、宗教的感情を掲げ、「道德の情操」「審美的情操」「宗教の情操」の説明がある。明治二八年田中治六他訳『麟氏實驗心理学下』（上巻は前年）Geltlinを知力的、審美的、道德的等に区分する。「情操」はない。○國府寺新作講訳『獨逸ヘルバルト心理学』「情操」なし。○藤代禎輔訳補『坪氏心理学』「感觸」を身体、知能、倫理、審美的の「感情」に分ける。「情操」なし。○ハラルド・ヘフデング著、石田新太郎訳『訂正改版心理学』高等感情として審美的、知性的、倫理的、宗教的感情を掲げる。情操については次の記述がある。「抑々感情ノ反省テフコトハ情操ノ特性ナリ。情操ノ含メル自愛元素ハ其人ノ感情ノ主トナリテ其人ヲ迷ハスモノナリ。」明治三〇年谷本富著『普通心理学集成上』「情操」なし。○ラット著、尾田信忠訳『初等心理学』情操を(一)知力的(二)美術的(美的) (三)道德的及び宗教的、の三種に区分する。他に「宏壯の情操」「徳義の情操」を掲げる。○元良勇次郎著『心理学十回講義』「情操」なく、感情を生理的、美的、社会的、に区分する。序に「蓋シ心理学ノ研究益々隆盛ノ域ニ入り愈々精緻ノ境ニ進マントスル今日」とあり、当時の心理学の状況がわかる。明治三一年中島力造編述『心理

撮要』情緒と情操を相互に可変的なものとし、情操を知能的、審美的、道德的の三種に区分し、宗教的情操をこれら三者の「合成情操」とする。明治三二年牧瀬五一郎著『新撰心理学』感情を一、單純感情二、事物に対する感情三、価値に関する感情四、宗教的感情に分類し、三をさらに真的、善的、美的感情に区分する。○山田禎三郎著『新編心理学』感情を「感應、情緒、情操」に分類、情操を「複雑なる事物又は心像の關係に對して、起るものなり」として、知力的、審美的、道義的、に区分する。○湯本武比古他著『心理学新論』「尊敬の情、道德的感情、宗教的感情の如きは皆所謂複合感情なり」とした後「美的情操」のみを獨立に説明、さらに「感情を分類して情緒と情操との二種となし、或は自己的、美的、社會的の三種となす等、種々の分類法なきにあらずと雖も、斯くの如きは、尙ほ精密なる分解を経たる研究の結果と曰ひ難きを以て、之を眞の感情の分類とはなすべからず。」と述べる。○元良勇次郎他訳『ヴェント氏心理学概論中巻』「情操」はなく、「複合的感情」に「高等美的感情」があるとされている。明治三四年伊賀駒吉郎著『解説心理学』「情操」なし。○『心理学書解説』全三巻、この中でリポー、ラッド、バルド井ンに詳しい「情操」の記述がある。ゼームスの「精緻なる情緒」

を「情操」としている。ル・ボンには「情操」が散見されるが詳述はない。ヴァント、スタウト、チーヘン、ケルペ、ビネーには「情操」はない。○野田瀧三郎著『最近心理學發達史』「情操」なし。明治三五年『續心理學書解説』レマンの解説中に「内的感情」を活動、自我、利己、美的同情、宗教的の六つに分類しているが、「情操」なし。○ウィリアム・ゼームス著、福來友吉訳述『心理學精義』「精微なる情緒」はあるものの「情操」はない。○速水混著『心理學』「情操の意義情緒に比較して表現的運動を伴ふと少なく且つ最も發達せる知的作用例へば判斷作用の如きものに伴ひて起るものを情操と云ふ。されど二者の區別は畢竟從來慣習上の用語に従ひて便宜上設けたるに過ぎず。科學上嚴密なる意義にての類別にはあらずと知るべし。」とした上で、知的(論理的)、美的、倫理的、宗教的情操に分類する。○松本孝次郎他訳『心理學新教科書』「感情」を「感情、情緒、情操」に区分し(但し明確な区分ではない、とする)、「情操とは合理の感・不合理の感・優美の感・高尚の感・道德的善の感・道德的惡の感等を云ふなり。」として美的・論理的・倫理的、に分類する。明治三八年福來友吉著『心理學教科書』「情念」を感情、情緒、情操に分類し、情操を「利害の關係より獨立したる觀念、或は欲

念の活動に伴ふ情念を情操と謂ふ。例へば詩歌の理解に伴ふ趣味、判斷、推理に伴ふ合理、不合理の感、意志的活動に伴ふ善惡の感の如きはなり。」として美的、知的、倫理的、の三種に区分する。明治四〇年福來友吉著『心理學講義』「情操」については前書にほぼ同じである。明治四二年野上俊夫他訳『實驗心理學講義』哲学からの獨立、客觀的科學としての心理學書を意圖した、とある。「情操」なし。明治四四年ジャッド著、大瀨甚太郎他訳『發生心理學』「情操」なし。○高島平三郎著『通俗應用心理講話』「情操」を知情、徳情、美情、宗教の情、に分類する。

以上、明治期心理學書によって「情操」及びその周辺について概観した。明治期に出版された心理學書をすべて調べたわけではないが、以上のことから次のような推断を下しても大筋において間違っていないであろう。(一)「情操」という用語は西周によって sentiment, feeling, Gefühl の訳語として先鞭をつけられた。(二)だが、この訳語は明治二十年代半ばまで確定しなかった。その理由はこの語がシナ語ではなく和製字音語であったことによるものであると思われる。(三)明治二四年以降「情操」以外のシナ語の訳語は姿を消している。(四)だが、それは専ら英語 sentiment の訳語であって独語の Gefühl、仏語の sentiment は「感情」

と訳される方が多い。(b)「情操」の概念については真・善・美、聖に対応する価値感情として、知的(論理的)、道德的(倫理的)、美的(審美的)、宗教的の四区分もしくはその一部をもって充てられることが多い。(c)心理学が学としての独立性を強め、科学的、実験的性格を確立するにつれて「情操」の概念の曖昧さが問題にされ、心理学の主要な関心事ではなくなってきた。

以上のことより結論としていえることは「情操」は心理学用語の体裁を装ってはいるけれども本来的には哲学用語とみるべきである、ということである。知・情・意の意識の三分法を確立したのはカントといわれ、真・善・美に聖を加えて四大価値の普遍妥当性を論じたのはヴィンデルバンドである。「情操」は哲学上のこれらの区分に対応する価値感情として、心理学に思弁的に応用されたものにすぎないのであり、これが教育上涵養すべき人間の最高位の情として明治初期の教育応用的心理学の中で説かれたということなのである。このように考えれば「情操」という用語の持つ極めて抽象的、観念的な性格が理解できるであろう。明治初期心理学においてかなり重視された「情操」という用語及び概念が、心理学がその独立性と科学性を強めるのに伴ってその主要な関心事となり得ず、単に感情の一部と

して極めて記述的に記されるか、無視されるようになるのもここに起因するのである。事実「情操」は、明治二〇年代以降、哲学、心理学の手を離れて、教育(学)上の用語乃至は徳目として重視されていくのである。

註

- ① 金田一春彦は日本語の語彙をヤマトコトバ・字音語・西洋語およびそれらの複合語・転成語など、に分類している。(金田一春彦著『日本語』昭和三年、二〇頁) 本論文ではこの分類に従っておく。
- ② 山田孝雄著『國語の中に於ける漢語の研究』昭和十五年、四九四頁。尚金田一春彦著、前掲書八五頁にも同様の記述がある。
- ③ 『上代語辭典』『時代別國語大辭典上代編』昭和四二年等。紙数の都合上、調べたものの一部を書名のみ記す。『新撰字鏡』『倭名類聚鈔』『類聚名義抄』『色葉(及び伊呂波)字類抄』『節用集』『下學集』『和訓栞』『雅言集覽』(及び『増補雅言集覽』)等。
- ④ 出典は『日本國語大辭典』昭和四七年に拠る。
- ⑤ 『史料大成權記一』昭和四四年、原文は白文の漢文体日記である。
- ⑥ 榎垣実著『日本外来語の研究』昭和五三年、一五頁参照。
- ⑦ 公元一九四七版及び中華民國六一年版。
- ⑧ 中華民國二五年、三六年、五六年版。いずれも記載内容は

- 同じである。ただ西曆一九六五年版には何故か「情操」の項がない。
- ⑩ 一七一年清の康熙帝の勅編による辞書。中華民国六五年版『索引本佩文韻府』に拠る。
- ⑪ 吉川幸次郎「私と辞典」(小林英夫編『私の辞書』昭和四八年所収)
- ⑫ 「巻四、心部」昭和三二年
- ⑬ 昭和四四年版
- ⑭ この結果、字音語が著しく増え、明治と昭和の国語辞典を比較すればヤマトロトバと字音語の比率が逆転していることを榎垣実是指摘している。榎垣実著、前掲書一七頁。
- ⑮ 齋藤毅著『明治のこぼ』昭和五二年、二四頁及び註を参照。
- ⑯ 齋藤毅著、同書第一章参照。
- ⑰ 大久保利謙編『西周全集』新版第一巻、三九六頁。この全集は第一巻出版後第二次世界大戦で中断され、その後改めて全三巻を出版したため内容の異なる第一巻が二冊あり、実質的には全四冊である。
- ⑱ これは Joseph Haven, *Mental Philosophy, including intellect, sensibilities and will*, 1857 の一八六九年版を翻訳したもので上冊七八頁、下冊本文一四七頁、引用書目一七頁にのぼる労作である。訳書原本一八六九年版を見ることができず一八七一年版に拠った。
- ⑲ 紙数の都合上、以下引用頁を省略する。
- ⑳ 原本は Rudolf von Jhering, *Der Kampf um's Recht*, 1872 の一八七四年版である。同版を見ることができず一八九一年版を参考にした。
- ㉑ NED (OED) の sentiment の項参照。
- ㉒ 谷本富著『普通心理學集成上巻』「我が國に於ける心理學の發達」より重引。
- ㉓ 明治一九年刊同書全訳書『心理全書』との対比による。
- ㉔ 『漢和大辭典』明治三十六年。尚この典例は『佩文韻府』に拠るものと思われる。
- ㉕ 西の最初の訳語「情思」も『佩文韻府』に記載のあるシナ語である。
- ㉖ 『哲學字彙』緒言参照。
- ㉗ Alexander Bain, *Mental and Moral Science*, 1864 訳書原本は一八八四年版である。
- ㉘ James Sully, *Teacher's Handbook of Psychology*, 1886 (即ち明治一九年)の翻訳
- ㉙ James Sully, *Outlines of Psychology*, 1884.
- ㉚ 註㉔に同じ。この典例も『佩文韻府』に拠るものと思われる。
- ㉛ 今田惠著『心理學史』昭和三七年、九一、二〇一頁。
- ㉜ 今田惠著、同書三四二頁。
- ㉝ ガブリエル・コンペーレ(仏)著、ウキリアム・ペーン英訳を重訳したもの。
- ㉞ 以下〇印は出版年が同じであることを示す。

- ⑳ George Trumbull Ladd, Primer of Psychology, 1896 の訳書。
- ㉑ G. T. Ladd, Outlines of Descriptive Psychology, 1898 (即ち明治三一年)を基にした訳書。
- ㉒ Wilhelm Wundt, Grundriss der Psychologie, 1896 の訳書。
- ㉓ William James, The Principles of Psychology, 1890 の訳書。
- ㉔ 『哲学用語辞典』昭和四九年、八四頁参照。又元良勇次郎

著『心理學十回講義』及び『續心理學書解説』を参照。
 ④ 『哲學事典』昭和二九年、及び近藤壽治著『教育の基礎としての現代哲學』昭和二年参照。

参考文献

村井実「『情操』という言葉」『教育学全集(増補版)』第九卷補説、昭和五一年。

(本学専任講師 教育学)